

セミナーダイジェスト

外国人介護人材ベトナム・ハノイ視察ツアー 5月30日～6月3日

明るく素直で向学心旺盛な留学生に期待…
質の高いベトナム介護人材確保に向けて現地を視察!



全国から集まった視察ツアー参加者へのオリエンテーションの様子。

挨拶する田中 優至

5月30日～6月3日、現地視察ツアーにてベトナム・ハノイを訪れた。

人口減少で深刻な介護人材不足の日本に対し、ベトナムは人口9500万人で平均年齢28歳と非常に若い。今回訪れたハノイ市は人口820万人で街には若者が溢れ、ODAをはじめ大型プロジェクト、高層マンションなど建設ラッシュで活気に満ちている。経済成長ではまるで地中から赤いマグマが噴き出す程の勢いだ。

そして、日本語学校や看護学校では、日本に行きたいという若者が、熱心に日本語を学び来日を目指している。

今回の視察ツアーは、大阪に拠点を持つ「青山メディカルグループ」がハノイに現地法人JVMCHRを設立し、毎年100名、延べ1000名の留学生(N2取得、介護福祉士取得)

の受け入れと採用・定着に向けて取り組みの事業スキームや、合わせてベトナムに有料老人ホームを建設し、日本で育った優秀な介護人材をベトナムで再雇用する循環システムの構築など、時代に先駆けた画期的なビジョンと経営戦略を学ぶこと。

更に、ベトナムの日本語学校や大学、病院、クリニック、有料老人ホームを視察すると共に、日本で介護人材をめざし、日夜、日本語学習や看護介護を学んでいる学生達と交流し、学生の日本や介護への想い、日本語の習得状況を現地で体感することで、外国人介護人材受け入れの足掛りとするのを目的に企画した。

【1日目】 5月30日

今回、定員を上回る25名が参加、日本からおよそ5時間のフライトを経てハノイ・ノイバイ空港にて合流した。空港の集合場所では参加者同志名刺交換等を行いながら待機し、全員揃うとバスに乗り、まずは目的地JVMCHR留学コンサルティングセンターへ向かった。

この時期、ハノイは気温38度程度で非常に蒸し暑い。バスの中

で簡単な視察ツアーオリエンテーションを済ませ、参加者がくつろぐ中に、まずは視察運営担当の私(小池)より挨拶。その後は今回の視察ツアーガイド、ベトナム人のタイン・ソン氏がベトナムの気候、人口や歴史、文化、今の流行等について日本語で紹介しながら、車中から建物や街路等の説明も行った。程なくして空港から45分ほどで目的地に到着した。

現地ではJVMCHRスタッフ、日本留学を目指す学生たち数名が笑顔で元気づけに「こんにちは」とお出迎え。4階講演会場へと案内された。

初めに視察ツアーの結団式として、当代表田中優至より参加者へ感謝の挨拶。JVMCHR社



視察ツアー参加者全員で記念撮影(ヒルトンハノイオペラホールにて)

のスタッフの紹介を行った後、青山メディカルグループ代表の岡田宗修氏が「外国人留学生受け入れシステムと経営戦略」をテーマに講演した。

まずはJVMCHRの親会社である株式会社青山ケアサポートについて紹介。平成14年4月大阪に設立後、通所や訪問等の在

宅介護関連事業を中心に事業を手掛けてきた。また青山メディカルグループは、1982年大阪府藤井寺市に青山病院を開院し35年間で大阪市、兵庫県に医療機関や介護保険施設等を次々に139事業所(平成29年6月現在)を開設。今や総従業員数2500名を超える規模へと成長し、エリアごとに広範囲にわたり事業を展開している。

JVMCHRは青山メディカ



ベトナム人介護人材の留学制度の講演をする岡田 宗修氏



ベトナムにおける介護人材雇用に向けて熱心に聴講する参加者の様子

ルグループの100%出資子会社として、日本留学コンサルやベトナム国内での日本語教育、介護教育等をサポート。また技能実習生の送り出し機関の紹介等、人材不足で深刻化する日本の介護現場とベトナムの若い人材を繋ぐ架け橋となり、両国の発展に貢献することを目的に設立された。

岡田氏は、本事業の立ち上げまでの経過や目的を丁寧に説明した。発端は、兵庫県内で事業を行う中に、7年ほど前から介護職員の人材不足が顕著になり始めたことに遡る。岡田氏は日本の人口構造から介護業界における人材問題に切り込み、国が示すように8年後(2025年)には全国で38万人弱の介護人材が不足していく実態を明らかにした。2017年現在の介護人材の充足率は94%だが、実際はもつと不足感が大きい。利用者との介護職員数の需要と供給バランスが大きく崩れていることを鑑み、早急に介護従事者を獲得し、超高齢者社会に対応する介護システムを構築することが重要であり、そのために具体的な介護福祉士の人材供給策を講じな

れば介護業界が崩壊すると言及した。

次に青山メディカルグループの施策について、過去の外国人介護人材開発の経緯を振り返る。2012年にフィリピンを人材供給国として選び、日系フィリピン人の人材調達や受け入れシステム等を学びチャレンジしたが、戸籍問題などで人材斡旋会社が計画通り人材確保が進められず、フィリピンを拠点に日系人を確保することの難しさを痛感・断念した。

その後、まだ技能実習制度が認められていない2014年、留学生の介護人材開発を念頭に当時大学で勤務し、アジア圏の大学との交流を行い、その事情に精通していた朝賀洋史氏(現関西医療介護協同組合事務局長)の協力を得て、ベトナムでのルートを探索し始めた。岡田氏は親日国で古き良き日本を感じさせるベトナム国に対して好感を抱いたという。そして、ドンドン日本語センター校長 グエン・ヴァン・ハオ氏(早稲田大学大学院卒)との出会いを機に、最終的にこの地に根を下ろすことを決意。ベトナムでの介護人材開発を本格的に稼働すべくJVMCHRを

2015年5月に設立し、11月より本格始動となった。

当時、ベトナム人留学生開発の課題として重要視されたのは、日本語能力の高さや日本留学への明確な動機、高度人材の育成スキームの策定、在留資格としての介護の可能性、日本で学習するための経費支援であったという。

山積する課題解決に向け、16年1月より親交の深いハオ氏に相談し、1期生20名のベトナム人学生をドンドン日本語センターに預けて経過を観察し留学プログラムを確立させた。その後今年4月に58名(内7名はN2取得済で直接介護福祉士専門学校入学)の養成を行った。N3レベルの学生は優秀で覚えも早い。日本語で十分にコミュニケーションが図れるため、介護現場でも好評だという。その間にも様々な学校と教育提携を行ってきた。学生確保ではベトナム共通学力テストで6.5以上の優秀な人材を選抜し、日本人スタッフにも劣らない高い能力を発揮する人材確保を前提としている。

学校、宿舎(一部負担あり)の経費支援を行っている。この考え方は貧富差問わず、どのような経済環境の生徒でもチャンスを与え、万が一途中で脱落しても、資格を取り就職しても奨学金の返還を求めない。つまり、性善説でいきたいという岡田氏の思いから始まっている。

一方日本では、社会福祉法人や医療法人での奨学金の拠出や、AHA(青山ホームアカデミー)日本語学校を開設した。2017年4月からスタートし、先に述べたようにベトナム人留学生を受け入れた。日本語学校の設立は難しくないが、質の良い日本語教師を探すのは困難。留学生の入国ビザ取得に関して最も留意すべきは経費支弁であり、奨学金は一人ひとり提供するため、どの学生にも法人ごとの奨学金を入国申請前に確定させる必要があるため、非常に悩ましいと岡田氏は繰り返した。また青山メディカルグループで外国人介護人材が最も困難を極める介護記録を克服するために開発したCIREPO導入についても説明。ICTを活用し、簡単音声入力介護現場での記録業務

削減に取り組んでいる。

技能実習制度は昨年11月に成立し、上乘せ要件として日本語レベルが追加された。通常3年間の実習受け入れとなっているが

5年に引き上げられる可能性が高い。ただし技能実習生の場合、人材レベルが優秀な留学生の能力（水準）に達しないことや、人材確保が難しく結果的に費用負担も大きいという理由から、グループとしては積極的な受け入れはしないという。岡田氏は参加者に対し「しっかりと送り出し機関と人材を選んでください」と注意を促した。

今後の展開は、N3～N4レベルの留学生を毎年100名受け入れ、N2取得後、介護福祉士を取得。介護人材の一連のシステムをさらに強化させたいとまとめ、講演を終えた。

続いてドンドー日本語センター



日越の素晴らしい絆を訴えるグエン・ヴァン・ハオ氏の講演

校長グエン・ヴァン・ハオ氏が「ベトナムの歴史・政治・経済やドンドー日本語センターにおける人材育成」について講演した。

「ハオと呼んで下さい」と氏は笑顔で挨拶。当時ベトナムと日本は親交も深まりつつある時期ではあったが、日本語を話せる人材は殆どいなかったという。氏は早稲田大学留学にて培った日本語や日本文化の啓蒙を図るべく、学校や大学等で指導し、延1000人に日本語教育を行ってきた。その後、ドンドー日本語学校を設立、合わせてハノイ貿易大学の日本語学部長にて現在に至る。また、優秀な教師に与えられる表彰を何度も受賞し、日本語教育



ハオ氏の講演風景

者の第一人者として、通訳や翻訳教育等を通して政府や各機関など両国間を繋いでいる。

ベトナムは4000年の歴史を持つ国。北属は1000年、フランス支配下80年、アメリカの支配下は20年。その後1945年にフランスから独立し1954年にディエン・ビエン・フーの勝利で北ベトナムが解放され、1975年にベトナム全土が解放された。幾度もの他国からの侵略や支配下に置かれながらも屈せず戦い、勝利を収めてきたその過程やエピソードについて、身振り手振りですこぶしく説明した。



1日目の視察が終わり美味しいベトナム料理を堪能。ビールも美味しいです!!

政策（刷新）を機に、現在市場経済政策をとっている。1973年に日本と国交樹立、今年天皇陛下が訪問されたことも話題となった。

ドンドー日本語センターについては、1984年に設立しこれまでに7万人を養成してきたという。現在5か所で行われている日本語教育を実施。教師数40名、2013年からEPAに基づく介護留学生に対する日本語教育をスタートさせた。今後は青山メディカルグループとの留学生受け入れや技能実習制度に向けた人材の輩出にも寄与していきたいと述べ、講演を終えた。

岡田氏、ハオ氏の質疑応答を終えた後は、参加者一人ひとりが視察ツアー参加の目的や抱負を述べた。「今すぐではないが、2、3年後を見据えて参加しました」あるいは、「以前EPAの受け入れで失敗してしまったので、今回こそノウハウを学びたい」等、様々な参加の動機を口にした。こうして1日目の研修を終えた後、岡田氏やJVMCHRのスタッフも交え、二行で夕食会場へ移動し美味しいベトナム料理をいただきながら交流を深めた。

【2日目】 5月31日

朝9時過ぎにホテルを出発し、午前中はドンドー日本語学校を訪れた。若く元気な日本語勉強に勤しむ学生たちに歓迎され参加者も頬が緩む。ここではハオ氏からの説明やディスカッションを行うグループと、学生たちとの交流を行う2グループに分かれた。

ハオ氏は日本語学校の特徴や授業のカリキュラム、学生の受け入れ等について説明した。参加者はハオ氏に次々と質問し、日越交流に関する様々な話も交え和やかな雰囲気での話が尽きなかった。

一方、学生との交流グループは、参加者と学生6名1テーブルで、それぞれ会話を楽しんだ。今回



ハオ氏よりドンドー日本語学校の教育方針と短期間に日本語が習得出来る教育内容を説明



(上)元気いっばいの学生たちとの交流。(下)学生寮には2段ベッドが多数並ぶ。(中央)交流を終えて記念撮影

ベトナムの学生はとにかく明るい!!

の学生たちは、入学して6か月間の研修を受けたN5レベル相当にあたる(来年4月に日本留学を予定している7名も含む)。参加者がゆつくりと話かけると、学生たちは日本語で懸命に答える。日頃日本人と直接会話をする機会がないため、戸惑いながらも笑顔を絶やさず必死で会話し聞き取るうとする姿がとても印象的だ。日本に行きたい、大阪に行きます、富士山に登りたい:楽しい会話が校舎内に響いた。

また校舎内には学生寮も完備されており、学生たちの案内で寮の中を拜見した。広さ30㎡ほどの部屋には2段ベッドが敷き詰められ、1部屋12名ほどで生活している。日本人は大部屋生活を嫌う傾向があるが、大家族制のベトナムではむしろ大人数を好むようだ。寮生活についても楽しみに語ってくれた。

美味しい日本料理店を学生と一緒に訪れ、食した後、午後からはタンロン大学を訪問した。

タンロン大学はベトナム初の民立(私立)大学で1988年12月に開学。現在、ベトナム教育



ベトナムでも第一人者の看護学科教授による授業風景



シュミレーションセンターでの説明



タンロン大学受付



ファム・チュン・キエン氏

訓練省に認められている。今回、看護学科のシュミレーションルームで、大学でのカリキュラムや授業内容、卒業後の就職先等について説明を受けた。ベトナムで看護師になる場合、日本のような国家資格制度はなく、大学卒業後およそ9か月間の臨床経験後自動的に取得することが出来、一定の医療行為も認められている。ただし、ベトナムにおける看護師の地位や給与は低く、更に医療機関そのものが少ないため就職率も低い。参加者からは看護師の資質や役割等、多くの質問が出された。

レクチャー後は、看護学生の授業風景を視察。看護教授の第一人者の内科の講義には多くの学生が熱心に受講していた。続いて、大学の図書館へと向かったが、丁度その時間帯は外気温40度を超えて、立っているだけで汗が噴き出るほどだった。図書館で一息入れた後は急いでバスに乗りし、

JVMCHR社事務所へと移動した。

ここでは青山メディカルグループのパートナーで、技能実習生の送り出し機関の一つであるクアンチュン建設&人材派遣会社 取締役会長のファム・チュン・キエン氏より、自社の紹介やベトナムにおける技能実習の教育の実情や介護分野への期待、送り出し機関としての対応の留意点、ベトナム人の受け入れのための管理組合の選び方等の説明から、受け入れにかかる費用等の説明を受けた。キエン氏は34歳。若く優秀で二見すると日本人と何等変わらない。質問では関西医療介護組合 事務局長 朝賀氏も対応し、更にクアンチュン社を通して技能実習制度で受け入れている長野県内でパン工場を営む北川氏も実例を紹介した。

研修終了後は、ハノイの観光名所でもあるホアンキエム湖が一望でき、予約も数か月待ちの人氣レストランでベトナム料理を堪能した。キエン氏も参加し交流を深め賑やかな時間を過ごした。また参加者は、ベトナム式マッサージやカラオケに出かけ、夜のハノイの街を楽しんだ。



美しいホアンキエム湖。観光地であると同時に市民の憩いの場でもある。

【3日目】6月2日

猛暑の中、園庭では高齢者や障害者10名ほどがティータイムを楽しんでいた。居室は全て同じつくり、ベッド数で調整していた。室料は個室（一人部屋）料金が日本円で65000円、4〜5人部屋で25000円程度。屋内にはデイルームやリハビリ室もあり3名のリハスタッフが常駐。現在は看護師35名が配置され、2名の医師が週に3回交代で診療を行っている。

朝8時にホテルを出発し、ノイバイ空港に近い有料老人ホームティエン・ドゥック高齢者向け介護センターを訪問した。家族介護が基本となるベトナムにおいては、老人ホームはまだ少ない。ティエン・ドゥックセンターでは、中流レベルの富裕層を中心に、個室、2人部屋、4人部屋等の入所102床が満床。この他、社長のドゥック氏の好意により貧困高齢者35名を無料で近しい料金で受け入れ看取りまで行っているという。屋外には家族用にプールやテニスコートが整備され、リゾート風な趣を醸し出していた。

施設見学後は大ホールにてティエン・ドゥックセンター社長 ティエン・ドゥック氏が歓迎してくれ

た。センター開設までの変遷や他国からの見学者訪問、また、看護教育の実習指導施設としての実習の様子を写真等で紹介しその後は質問タイムとなった。この有料老人ホーム入居に関する予算計画や事業収支、受け入れの仕組みがどのようになっているのかとても興味深く参加者から多くの質問が続く。先に訪れたタロンン大学では看護師の就職場所が極めて少ないと聞いたが、ドゥック氏は国内の看護師不足を主張した。若干の矛盾に参加者が首をひねる場面もあったが、国内で先駆けて施設整備に取り組み

ティエン・ドゥック高齢者向けセンター入口



ホールでレクリエーションを楽しむ高齢者の様子



ドゥック氏の説明と通訳



ドゥック氏に対し、敬意を表するとともに惜しめない拍手が送られた。午後からはハイ市の108軍事中央病院を訪問した。軍事病



ドゥック氏を中央に記念撮影



見学後、ドゥック氏から施設説明がなされた会場の様子

院は1951年4月1日に設立され、ベトナム人民軍の中央病院としてだけでなく、ベトナムの二流病院としても評判が高い。ここでは最新の医療機器が完備され、ベトナム全土から患者を受け入れているという。今回、日本からの視察訪問の受け入れは初めてということ、副院長ラム・カーン氏をはじめ、看護師長、幹部スタッフ一同に歓迎を受け、代表の田中も感謝の意を伝えた。ハーン氏より病院概要を説明頂いた後、医療関係の参加者からの質問にも丁寧に対応。現在、新病院の計画中でも楽しみであるのと締めくくった。

説明後は病院見学へ。ベトナムでは病院ベッドが不足し、一般的な病院は1ベッドに1名でなく2名、3名で入院している。その様子をガイドの案内にて車内映像で目の当たりにした時は大変ショッキングだったが、軍事病院ではそのようなことはないようだ。しかしながら、感染症病棟やICUの中まで案内されたのは参加者も驚いた。ベトナム有数の高度医療の病院を見学し、ベトナムの医療事情を視察できたのは貴重な経験となった。



立派な会議室で、副院長ラム・カーン氏より病院の診療機能や診療活動の説明と活発な質問の様子



108 軍事中央病院の入口



ハードスケジュールにも笑顔の素敵なお二人



スケジュール通りツアーを進め、親切なガイドのティン・ソン氏

再び J V M C H R 留学コンサルティングセンターに移動し、今年10月から日本留学が決まっているN4～N3レベルの学生およそ15名と交流した。前日、日本語センターでの学生との会話で慣れたせいも、参加者全員とても笑顔で、気楽に話しかけていたようだ。また語学レベルもアップしているため会話も通じやすい。約30分程度の時間を過ごし、最後は学生代表、参加者代表それぞれ



交流を終えて参加者代表と学生代表から、「素晴らしい意義のある交流が持てました。」「緊張しましたが楽しく話せました。」と感想が発表された。日本留学を控えている学生たちとの交流の様子。各グループで会話が弾む。

3日目の研修が無事終了し、自由行動がとれる最後の夜ということもあり、夕食後は土産を買うために観光を兼ねて市内に繰り出す参加者も多かった。この日はベトナムの「子供の日」ということもあり、夜遅くまで買い物や公園の遊具で遊ぶ親子連れが群をなしていた。ベトナム人の家族愛に触れると共に、ハノイの夜は活気に満ちていた。また、夜になっても蒸し暑く、参加者6名で食べたアイスクリームが絶品だった。

【4日目】6月3日

視察ツアー最終日。朝9時にホテルを出発し、さくらクリニックを訪問した。入口に到着すると、まるで日本に戻ったような錯覚を受けるほど、その佇まいにほっとしてしまう。さくらクリニックは、千葉県に拠点を置く医療法人社団羊会を中核とするこひつじ会グループと、ベトナム・ハノイに拠点を置くベトナム医療法人グリーンクロス社との合併により J V M C が設立され、そ



一戸氏の説明を受ける参加者の様子(左)。さくらクリニック1階受付にて(右)内科医 安倍氏、事務長 一戸氏とスタッフの皆様

の直営クリニックとして2014年3月に開業した。まずは事務長二戸謙二氏にクリニックの説明や施設案内をしていただいた。こちらでは主に日本の

外資系企業や日本人旅行者の健康診断、総合診療、歯科診療を行い、日本人内科医師 安部氏や日本人の女性歯科医である松岡氏が常駐。お二人からも挨拶や取り組みや赴任の動機のコメントを頂いた。その後2グループに分かれて6階建のクリニック見学へと移動する。建物内は広く診療室、歯科や内科、処置室等が並ぶ。屋上からはハノイの街が一望でき、大きなハスの池がいくつも並んでいた。また3階には日本のメナード（化粧品会社）がテナントとしてエステを運営している。やはり日本人スタッフがいることで安心感もひとしおだ。最後の全体質疑を終えた後は二戸氏を囲んで記念撮影を行った。ハノイにいながら日本にいるような、そんな心地よさが得られたひと時となった。

昼食後の観光・自由時間では国立ベトナム歴史博物館でベトナムの歴史に触れ、残り2時間ほどの自由時間を各々楽しんだ。炎天下ゆえ長時間の外出が厳しく、買い物を終えたとカフェで時間を費やす参加者も多かった。

18時から宿泊場所であったハノ

イオペラのホールにて、再び岡田代表にも参加いただき、最後の総括（ツアー修了報告会）を行った。

まずは代表の田中より参加者へ視察ツアーのねぎらいと感謝の言葉を述べた後、関西医療介護協同組合 事務局長 朝賀洋史氏が「ベトナム人介護人材の雇用の具体策」をテーマに、ベトナム人の具体的な受け入れについて、52名の実際例を紹介しながら、入管をはじめ、宿舍、日本語学校やアルバイト他を詳しく講演し、留学生の受け入れについて理解を深めた。また、JVMCHR代表 岡田氏より最終日の挨拶後、参加者お一人おひとりから「とても充実した楽しい時間でした」「介護人材の受け入れ等、これまでモヤモヤしていたものがすっきりしました」等、ツアーで得られた多くの学びや今後の外国人介護人材受入れの抱負などの感想をいただいた。

懇親会では最後のツアーの振り返りをしながら楽しいひとときを共有し、更なる交流を深め、21時にはバスに乗り、一同空港へと向かった。

3泊5日（機内1泊）の短い旅だったが、参加者からは、大きな収穫を得たと、いい評価をいただいた。ただベトナムは、今、発展途上の過程にあり年金・医療の給付が不十分で、介護制度も確立出来ていないこともあり、色々と矛盾点を感じたことも事実である。

今回のツアーを通じて、改めて日本の社会保障制度の素晴らしさを実感した。参加者は、EPA（経済連携協定）、青山メデイカルグループ独自の留学制度や本年11月施行の介護分野の技能実習生制度、ベトナムの介護人材、送り出し機関の動向を現地で学び、外国人介護人材を雇用することのメリット、デメリットが明らかになったのではないかと思う。

外国人介護人材雇用の手段としての3つ（EPA介護福祉士候補生・留学生・技能実習生）の選択肢の中で、今後、多くの法人がどのようなやり方で人材を確保し、育成、定着させるのか、今回の視察ツアーがその糸口をつかむきっかけになれば幸いである。次回は9月4日（月）～9月8日（金）に「外国人介護人

材ベトナム視察ツアー」を開催予定している。

（文／小池 環）



挨拶をする岡田氏とまとめの講演をした朝賀氏。

修了報告をするツアー参加者

ツアー中とても熱心に学ばれた参加者



Hiltonハノイオペラホールにて行われたツアー修了報告会と懇親会で参加者同士の交流も益々深まり、再会を誓った。皆様本当にお疲れ様でした。